

# ふるさと再発見

## ～幕末維新と徳地～

### 隊士たちの学習 — 船津の水練場跡 —

「徳地の昔ばなし」に、次のような話が載っています。

「そのころ、奇兵隊の募集がありました。士分（武士）にとりたててやるというので、大変な意気ごみでありました。ところが、その検査たるや、まな板をとり出して、さあ、手を出せ！ 大上段に刀を・・・そのとき、手をひっこめたら合格できません。」

慶応2年（1866年）6月、約15万人もの幕府軍が長州を取り囲みました。この話は、第二次長州征伐、いわゆる四境戦争前夜の徳地の出来事をおもしろおかしく子や孫に語ったものでしょう。藩内の慌ただしさや急ごしらえの隊士募集の様子が伝わってくるようです。

さて徳地では、この時期、多くの若者が銃陣（ミニエー銃を使った散兵式訓練）や剣撃（刀や槍を使った訓練）の訓練を受け、厳しい選抜の後に約300名近くの若者が奇兵隊や遊撃隊、鷹懲隊（「諸隊」と言います。）や徳地半大隊（農兵隊）に志願兵として参加しました。

彼らの日々の生活はどのようなものだったのでしょうか。（「奇兵隊日誌」より）

午前五時より七時まで	文学稽古（読書）
午前六時より九時まで	剣術稽古
午前八時より正午まで	槍術・銃陣・野戦砲射術稽古
午後二時より五時まで	大砲稽古
午後六時より八時まで	文学稽古（読書）

実は、徳地にやって来た奇兵隊の10月26日の記録にも「今日より本陣において、朝夜の読書を相始めること」と出ています。先日、「松下村塾」が「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産となりましたが、理由は近代化を目指す若者たちの学習の場だったからと言われます。驚くことに、アメリカやヨーロッパの歴史・地理、民主主義やナポレオンなども学習の内容だったことが伝わっています。

伝承ですが、徳地の伊賀地船津は水練場、二の宮神社社務所が隊士たちの学習場所だったと言われます。古老の話では、船津には櫓を建てた穴のある岩があったそうです。農民であっても実力次第で隊長にもなることができましたので、新しい時代のために、厳しい訓練に堪えた徳地の若者たちの姿が浮かんできます。



船津の水練場跡（二の宮大橋から）



二の宮神社